

森の自由人 122

狸泥舟

日本人の忖度尽くし

報道ステーションというテレビ番組をちょっと覗いたら、石破首相をはじめ立憲民主党の野田代表や各政党の党首がそろって出演していた。すぐにチャンネル変えようかと思ったが、せっかくの豪華メンバー(?)だから、敬意を表してしばらく見てみようと思った。

石破は例の自分を押し殺したような表情で、同じく意味不明のことをしゃべって、うなずいて自分だけが納得している。自民党の人材が払底したことを物語っている。

注目は、トランプのイランの核施設爆撃だ。これに対して正面から異を唱える党首は1人もいなかった。要するに核爆弾さえ消えるなら、何をやっても容認されるというのだ。確かにヨーロッパ諸国と似たような論調である。

そもそもこんな暴力主義が許されるわけがない。それを許すから究極の暴力兵器である核爆弾が存在するのだ。暴力主義を肯定する限り、永遠に兵器の進化は止まらない。国際法にはもちろん違反するし、アメリカの国内法だって怪しいものだ。しかし、イランの核兵器が破壊されたという淡い期待が、安心感となって各国は忖度主義に走るのだろう。安心どころかあらたな紛争の扉を開いているのに、各国も日本の党首たちも暢気なものである。

どうしてこのような紛争を拡大させるような暴力行為を、まあ偉大な国であるアメリカがするのか。そして、こぞって国々が容認するのだろうか。日本もなぜ忖度するのか。

日本こそ暴力主義では世界平和は達成できないと声をあげるべきだ。各国と足並みがそろわないことが怖いのか。非常識と誹られないかと忖度するのか。こういう時こそトランプじいさんを見習ったらい。非常識をもって世界の経済、社会秩序を混乱に陥れているではないか。遠慮することなどあるものか。

若干、危惧がないでもない。そのように発言したとたん、CIAに暗殺されるかもしれない。アメリカはそのような暴力を厭わないのだから。

ついでに言わせてもらおう。防衛費である。何がGNPの5%だ?世界中がそのような非生産的なものに金を注ぎ込むのか?ばっかじゃなかるか。殺し合いの道具作るより、その金で飢えて死にそうなやつを助けろ。

アメリカは防衛に応分の負担を求めるが、断固拒否すべきだ。それなら日本を守ってやらないぞと言うなら、大いに結構。占領軍には早く帰国してもらいたい。これ以上アメリカの防波堤になる必要はない。中国にもロシアにも、ましてや北朝鮮にも海を越えて日本に攻めてくるような国力はない。やれば自身の破滅である。

この少子化の時代に、自衛隊なんか入るやつはいない。戦後80年日本の若者は完全に軟弱になっているのだ。平和ボケだけど大いに結構。しかし、日本民族をいったん怒らせるとあとが怖いよ。何せ神風特攻隊はトランプじいさんの非常識を上回るのだから

トランプじいさんの教訓

日米の関税交渉は行き詰っているようだ。それは当然だ。アメリカへの最大の輸出品である自動車の量が多すぎる。トランプは自分の首を絞めることになるから、容易に関税を引き下げることはないだろう。30～35%の関税をかけられても、日本車の品質は高いのだから、十分販売できるのではないか。それに比べてアメリカ車は日本の道路事情にマッチしないから、今後も輸入が増えることはないし、そのような品質向上もないだろう。

日本の失策は、自動車輸出に頼り過ぎたことである。農業でいえばモノカルチャーだ。モノカルチャーが気候変動に弱いように、工業製品だって単一商品に頼っていれば、トランプショックのようなことがある。もっと多様性のある製品作りに切り替えないといけない。またしてもボーっと生きているぼんくら政治家の影が疎ましい。

こういう教訓を与えてくれたトランプじいさんには感謝する必要があるだろう。国民も目先の安穩ばかり追い求めないで、好調を常に維持する方策を考えていかなければならない。高度な技術は応用性も高いはずである。

そもそも自動車などという SDGs に反する製品ばかり作るのはよくない。便利になればなるほど道路などの施設の高度化も必要になるし、そのために生じる自然への負荷は計り知れない。便利さを追求するあまり、人類は寄って立つかけがえのない地球を破壊しているのだ。これからの人間は進化ではなく、よりよい退化を目指すべきではないか。まずはそのための哲学が必要である。

トランプ関税を奇貨として、よりよい世界をつくるチャンスがやってきた。

森吉逝く

石塚森吉（いしづか もりよし）が亡くなった。林学人として最高の名前だった。大学では「もりきち」と呼ばれて親しまれていたが、私はいつも「もりよし」と呼んだ。いずれにしても森を寿いだよい名だった。

人好きのする容貌で、しゃべり口も温厚、人を怒ったことは見たことがない。結構きついことも言っているのだが、とぼけて愛嬌があるから人を怒らせない。得難い性格だった。

彼の向島の実家の近くに、作家の深沢七郎がやっている夢屋という今川焼屋があって、そこにしけこんでいたら、深沢にケツの穴を掘られそうになって、慌てて逃げてきたと言う。深沢のサンダルを間違えて履いてきたよと頭をかいていた。

大学の学園祭の茗溪祭で、ひま林（我々林学科は他学科の連中からこう揶揄^{やゆ}されていた。）はラーメン屋を出店した。森吉は姉さ被りにエプロン姿、なかなか似合っていた。そのせいでもなかろうが、黒字を出したのはひま林屋だけだった。そのあと打ち上げでべろんべろんになった森吉は、巨大な張りぼてゴジラのオブジェに顔から突っ込んで、鼻骨を強打した。

無類の酒好きで、幸せそうに酒を飲んでいて。もちろん植物なかんずくシダが大好きだった。酒を飲みながら植物談義をしていると、決まって新潟県柏崎のばあさんの話が出てきた。幼いころから山野を駆け巡って、草木に親しんだ生い立ちがわかる。だれが名付けたかは知らないが、根っからの「森吉」だった。

私は、造林系の研究論文が必要になると必ず森吉に頼んだ。彼は、役に立ちそうな論文を古いものも含めて見繕ってくれた。それで過去の地道な研究で優れたものがあることを知らされた。それを思うと、現在の研究者が必ずしも過去の研究に立脚しているとは思えないことが残念だ。

春風駘蕩^{しゅんぷんたいとう}とは、森吉のためにあるような言葉だ。真似しようと思ってできることではない。根っからの善人なのだ。仕事上の苦労話もあまり聞かなかったが、研究所の領域長になってさすがに人事では苦労していた。彼が属した造林系は研究者が多く、もともと研究者は我儘なので、地方の支所への配置を嫌がる者が多かったのだ。人事など希望通りで当たり前、希望に沿えなければ恨みを買う。最初から希望を聴く気のない林野庁に比べれば、よほどいいと思うのだが、研究者は贅沢だったから、大変だっただろう。

最初血尿が出て、腎臓がんが発覚した。10 数年前のことである。以来転移、好転、悪化を繰り返して、言いようのない不安にさらされ続けたことだろう。しかし、絶望はなかったように感じる。少なくとも私には、いつも春風駘蕩の森吉だった。

毎年巡ってくる珍しい花の季節には訪れて再会をよろこび、あるいはまだ見ぬ珍種を探しては愛で、衰えていくであろう体に反比例するように気力をふりしぼった。しかし健康な者の何倍もの充実した人生を送っていた。見事な生きざまというよりほかはない。

大学の同期でグループ LINE を組んでいた。酒飲みの雑談みたいで気楽なやりとりだった。知らない植物をアップすると森吉が、知らない昆虫なら S が教えてくれる便利なものだった。

4 月中旬ごろ、「今日がんセンターの治療終了。緩和ケアすることに。抗がん剤で 3 年もったが効果がなくなった。次の冬は自分でも無理と思う。この夏、八丈島か沖縄に行ければラッキー」との書き込みが入った。そんなに悪いのかと愕然となった。

そうして 6 月の初め、森吉から LINE の電話が入った。

「もうもたない。家にいるが、人に会うのも難しいから、これでおさらばする。みんないい友達で楽しかった。みんなによろしく伝えてくれ」と。

奥さんの介添えを受けていたようで、何としても別れを告げたかったのだろう。それから 20 日経って奥さんから逝去の知らせが届くまで、グループ LINE はふつうに続いたけど、森吉の書き込みはなかった。既読の人数は変わらなかったから、たぶん見てくれていたのだと思う。

一陣の風が吹き抜けた。みんな見ろよ、森吉シダが手を振ってるぜ

君逝くやいつに変わらぬ羊歯の笑み